

## 三好さんの大きな功績

JA3USA/島本正敬

JA3UB三好二郎さんが身近におられなくなっても2ヶ月が過ぎました。その間も彼に関わるエピソードが度々思い出されます。それに、いろいろな方から三好さんの話を耳にしました。はっきりともの言ったり、思い切った行動をされる三好さんでしたから、共感する人、反感を持つ人、いろいろな思いを持った方がいらしたはずと思っていましたが、三好さんが亡くなってからの2ヶ月間にお会いした方から最も耳にすることは、彼がいなくなったことの損失の大きさのことでした。お別れの会でのメッセージでも、多くの三好さんの功績が話されました。しかし、僕が三好さんの最も大きな功績だということについては余り紹介されなかったように思います。もし、ご存知でない方がいらしたらとても残念なことと思い、それについて少しお話しをしてみたいと思います。

今から15年前の1992年、三好さんのお供でベトナムの首都ハノイを訪れました。もちろん無線機やアンテナを持っての旅で、まるでちょっとしたDXペディションのようです。でも、行き先は何とベトナムの郵政省。ハノイでは国のゲストハウスに滞在し、ベトナム郵政省で郵政次官を前にアマチュア無線の概論から、日米のアマチュア無線の免許制度等に至るまでのお話しをさせて頂きました。その後デモ運用のためのアンテナを郵政省の建物の上に設置してリグをセット。コールサインもその場で、ベトナムの割り当てプリフィックス+電話の市外番号を基にしたエリア番号+「ベトナムテレコム」を組み合わせたXV4VTと決まりました。



こうなるとDXペディション的な運用となるのが相場でしょうが、僕達は運用せず、郵政省の方々にマイクを渡して運用をしてもらいアマチュア無線を理解頂くことに専念しました。前述のように、僕は三好さんに連れられてベトナム郵政省を訪れ、アマチュア無線のことを郵政省の方々に理解して頂けるようにお話をしただけなのです。ベトナム郵政省の次官(後に郵政大臣)にアマチュア無線のお話を聞いて頂けるように段取りを行うまでの道程がどれほど大変だったろうかは皆さんに想像頂けると思います。そんなことを三好さんは一言も言わず、着実にベトナムのアマチュア無線解禁に向けて努力をされていました。この後、ベトナムでアマチュア無線がスタートし、海外のハムにも解放されるようになりましたから、J13ZAGのメンバーを含めベトナムでアマチュア無線を楽しんだ方々も少なくないことは述べる必要がないでしょう。

この種のお話は、ベトナムにとどまらず、中国、カンボジア、ミャンマー、バングラディッシュ等、アジアの多くの国でアマチュア無線が誕生したり、再開したりする際に、三好さんの努力が大きな力となっていたのです。このことが余り知られていないのはDXペディションのような派手さがないからでしょう。

全く一人でできることではないことも多くありますから、いろいろな方々を巻き込んだり、いろいろな仕掛けを作ったり、私財を投入したりしながら、努力をされてきたのです。ご存じなかった方々に、三好さんの大きな功績を知って頂ければと思います。

# 三好二郎さんのお別れに際して

DF2CW Kuni 壱岐

私は、Jiroさんから親しくKuniさんと呼んで頂いておりましたミュンヘンのDF2CWです。

Jiroさんとの思い出をご紹介して、ある日のJiroさんを偲んで見たいと思います。

Jiroさんは私のシャックからQRVした数少ないJAのHAMでした。ある朝スイッチをONにして21MHバンドを覗いたら、JA3BOAの乾さんのシグナルが聞こえました。JiroさんはDL/JA3UBでコールしました。乾さんは、多分シグナルが弱かったからでしょうか、大変驚いた様子でした。Jiroさんは「私の声を忘れてもらったら困りますがな」と大阪弁で応答していました。乾さんは、UBさんならいつも59で入感するのに、この時はどうして弱いのだろうと思ってののかも知れません。乾さんの感度の良い設備とコンディションに助けられたQSOでした。この時の様子は一昔過ぎた今日でも鮮明に思い出されます。

Jiroさんの最後の外国旅行となってしまったコブレントツでのJAIGミーティング2007に付いてはJAIGニュースに書きました。私達は、JiroさんとMioさんをミュンヘン到着からフランクフルト空港までお手伝いできましたことはこの上ない光栄でした。私達はJiroさんとMioさんを、ミーティングの合間にモーゼル河畔にある、私達の知り合いが経営しているキャンプ場にご案内することが出来ました。ワイン畑のあるモーゼル川の谷で、夕日を見ながら静かなひと時を過ごすことが出来たのです。夕食には旬の白いアスパラガスを賞味していました。大変食欲があったので嬉しくおもったところでした。ドイツ的な雰囲気味わって頂いたひと時でした。



ある時、私達は三好さんご家族と、とあるレストランに夕食のご招待の栄に与りました。夕食後暗くなった小路を歩いている時、Jiroさんがお孫さんの手をとって歩く姿がエリカの目に留まりました。お孫さんは一生懸命おじいちゃんの左手を握ろうと上に手を伸ばしているのです。エリカの好きな岩崎ちひろがこの情景を見たら、可愛らしいシルエットの絵が出来たことでしょう。私達は機会あるごとに、心優しい Jiroさんの姿を思い出して話し合っています。

スイスの詩人で作家でもある Carl Spittlerは次のようなことを言っています： Menschen zu finden, die mit uns fühlen und empfinden, ist wohl das schönste Grueck auf Erden.」

即ち、「お互いに、心にふれあい理解できる、そういう人にめぐり逢えることは至上の喜びです」と。

Jiroさんは、私達、そしてJAIGグループにとって、まさにこの人だったのです。

奇しくもJiroさんと私は1つ違いですが、同じ誕生日です。共に「古稀」を祝えるまで長生きして欲しかったと思っていました。

私達、そして私達のJAIGグループは、Jiroさんのご冥福を心からお祈り申し上げます。

合掌

## CNの旅

泥と木材で造られた要塞村、家々には大きな窓もなく一見薄暗い空間での陰気な生活を想像していたが、その隠されたテラスは旅人の想像とは裏腹に快適な空間であった。あたかもその場所だけは地中海の小島を代表するあのカサブランカ(白い家々)のテラスに相い通ずるものがあった。

ゆったりした昼食を終えた一行は、土ぼこり甚だしいカスバ内の道から再び中央部舗装の幹線道路に戻った。カスバの人家はすぐに見えなくなり道路の両側には再びゴロタ石の転がる岩漠が広がっていた。それでも乾いた川筋と思しき部分には所々椰子の林が青く固まり、正直、安堵感をおぼえたのも事実であった。この辺り、やはり川筋に近く都合よく水脈に当たるところもあるのであろう。今までと違い20-30分走ると宿場町といおうか道路わきに数軒、数十軒の人家が集まる集落が見られるようになった。しかし集落を過ぎるとまた岩漠に変わりはないが、その様相は次第に砂っぽいものになりつつあった。時に集落のはずれに岩漠には違いないが、その岩塊がそれとなく整然と並んでいる部分があった。ドライバー氏いわくあれは墓地だとか。ひとたび大きな砂嵐が来ようものなら、その場所は永遠に砂の下になり葬り去られてしまうことも珍しくないとか。

道路は次第に川筋に近づき、ある大きな椰子林の集落に吸い込まれていった。今までにない大きなオアシスのようだ。入り口と思しきところには何度か目にした入場門といおうか、粗末ではあるが大きな門柱を思わす建造物があり、くにくにくとアラビア文字が書かれていた。カサブランカから延々と走り続けた幹線道路はここまでで、最果ての町ザゴラに到着したのだ。町の中心部と思しき一帯にはコンクリート造りだろうと思われる平屋の建物が幾つか見られたが、おおかたの民家はやはり土造りである。中心部をはずれると大地はますます砂っぽくなり、街中でさえ車の後塵には閉口させられた。サハラ砂漠の入り口に位置し観光客には人気のスポットらしく、椰子の木が群生する中には一つならずホテルをみかけた。ただ長い道中、日本人には一度も会うことがなかったのは特筆すべきことであった。

車はある建物の前に停車した。背の高い椰子の木に囲まれた三階建て位はあるうか、一見デイズニーランドにでも迷い込んだかと思わせる変わった雰囲気のある玄関である。もちろん我々が投宿するホテルであることは誰しも想像に難くはなかったが矢張り「何と何と」という感じである。ベルベル人のセンスなのか、押し寄せてきたヨーロッパ文化のなせる所以なのか、我々の眼にはインターチェンジ脇にあるラブホテルを想像してしまう面構えであった。と、バラバラと子供達が集まってきた。手に手に藁とも草とも判らないもので作った粗末で小さな人形を差し出してくる。彼らも心得たもの、当然言葉は通じないものと踏んでいるのであろう。ただただにこやかな顔をして迫ってくるのだ。その屈託のない目をみていると皆まとめて受け取ってしまいたい衝動にかられてしまっただけで一瞬困惑した。

玄関の面構えはさておき部屋に入って驚いた。とにかく砂っぽい、当然といえば当然ではあるが、窓枠はいうに及ばず、テーブルの上、ワードローブ、いたるところジャリジャリである。バスは無く、シャワーの出方もたよりない。砂漠の街とはこういうことなのかと今さら納得した。



世界遺産のクサル (= 要塞村) アイド ベン ハットウ 丘全体が強固な要塞として造られているが上部は風化が激しい。窓は全くといって良いほど見られない。多くの映画のロケ (アラビアのロレンス、ナイルの宝石など) に使われた

夕食の時間は大きなテーブルを囲んで盛大なものになった。なぜなら、この辺境の地ザゴラまで分け入った最大の目的、T氏夫妻がこの地で医師として活躍している愛娘に会う、そしてその元気な姿を確認することがかなった瞬間であったからだ。そのT娘先生、がっちりしていて上背もあり、することなすことときばきして、われわれ爺しいが近づけば蹴散らかれそう、を想像していた我々である。しかし、対面の瞬間、誰も口にごそ出さなかったが、一様に期待を裏切られたに違いなかった。何と何と彼女、小ぶりできゃしゃ、おっとりしていて口数も少なめ。その上、白である。ようまあこのAFで、すごいなあ、えらいなあ、日本の医師免許が認められなくて三年も首都のラバトの所轄官庁に通いつめたとか。途中から飛行機を利用して、往復二日の行程のなかをである。恐らくこの辺境の砂漠の地で育った主人のハッサンの純粋なところが彼女をとりこにしたのかも、それとも決して豊かでない現地の人々の現状に医師冥利を感じとったのか。宴は日付けがかわるまで賑やかに続いていった。

そして、そして、遂にご婦人連が最も気にしていた砂漠の遊牧民ノマドのテントに宿泊し、彼らと食事を共にし、ラクダの背に揺られて砂漠を行軍するその日がやってきた。

砂漠の砂は文字どうい砂であった。あくまでも細かく、手のひらに載せてかざすと跡形も無く崩れ落ちていく。砂吹雪もなく穏やかに見える日でも、砂はかすかな風により移動していた。そしてそれは波打つ文様を作り、その文様の一端は雪煙が舞うように舞い上がり、一方ではなだれのように崩れていった。はじめ道路を走っていたランクルはフセインの号令のもと一斉にてんでばらばらのルートを走り出し、砂丘の向こうで出会いた別れと、自由な砂漠ライディングを楽しませてくれた。砂丘の中には所により椰子の木が数本生えている所があったり、草とも木とも言えるような低い植物がカラカラの状態で群がっているところもある。しかし大部分は砂の大地で、その中でもややしまった部分をたくみに選びながら車を走らせているようだ。歩くに窮するような深い砂地は明らかに避けているようである。車は時に大きくバウンドするがドライバー氏、我々の年令も考えて控えめな運転をしてくれているようで、頭を天井に打ち付けるようなことは終ぞなかった。砂漠の中には一瞬、雪が積もっているのかと思えるほど真っ白く見える場所があった。行き先の無い水が溜まっては蒸発を繰り返し、残された塩分がこのように大地を覆っているのだと説明を受けた。



なんと、オアシス都市ザゴラのホテル正面玄関です



砂漠は静かな日も砂煙にさらされていた



夜間出会うと一瞬ドキッしま

ようやく行き着いた砂漠の遊牧民ノマドのテント村。そこには6張りほどのテントが張られ、少し離れた砂丘の陰には10頭を超えるラクダがたむろしていた。

ラクダ達は一方の前足を膝関節の部分で折った状態でくられ、立ったり、座ったり三様の姿勢でおとなしく群がっていた。我々には何となく可哀そうにみえたのだが、膝を折った状態でくるのは、彼らの行動を規制するための処置らしい。三本足で立っているラクダは何と無く不自然で哀れであった。

テントにはかなり厚手の布が使用されているが、我々が見る帆布ではなかった。案外広く畳八畳くらい、あるいはそれ以上の広さであった様に思う。食事をするテントは更に広く、テーブルに相当する食卓がしつらえられ、それを囲むように腰掛が作られていたが椅子ではなかった。食事は毎度のタジン鍋、モロッコ風肉じゃがで少々辟易した。食後はベルベル人による民族音楽で歓待を受けた。タンバリンよりやや大きめの金属製の打楽器とバイオリン、そして女性のボーカルであったが、あまり広くないテントの中では充分過ぎるほどの迫力があつた。メロデーは単調で哀愁を帯び、どこも無く日本の盆踊り歌にも似ているように感じた。帰路空港でモロッコ音楽のCDを買って帰ったが、あまりにも現代風アレンジされていて、テントで聞いた感動は再現できなかった。

夜間は二組四人づつ、それ専用を用意されたテントに移って寝ることになった。出発前からここでの防寒を如何にするかは各家族ともに大問題であった。ある者はホカロンを大量に持ち込み、ある者はわざわざカイロを持参し、またある者はスキーに出かけるいでたちで床についた。砂の上に原地産の絨毯が分厚く敷かれ、同じ絨毯と思しき掛け布団。暖房も明かりも一切なしである。これで一晩寝れるのか、かなり不安であったが床につくと結構温かく、あたりが白んでくるまで熟睡した。それほど疲れはてていたのかも知れない。

明けてこの朝は元日である。それぞれにテントを抜け出して思い思いの場所から初日の出を待った。砂漠の向こうに低く連なる山の端から真っ赤なご来迎を迎えるのは普段とあまり変わらず感激するほどでもなかったが、人の後ろに出来る影の長いのには感激した。影は曲げられることも無く平らな砂の上を真っ直ぐ伸びていた。日が昇ってしばらくの間、砂丘の起伏に出来る影の変化の美しさはかつて経験したことのない神秘的な現象で、ただただ見とれるばかりであった。

カッコイー : 上  
砂漠と影のセレモニー : 中  
ラクダで行軍 : 下



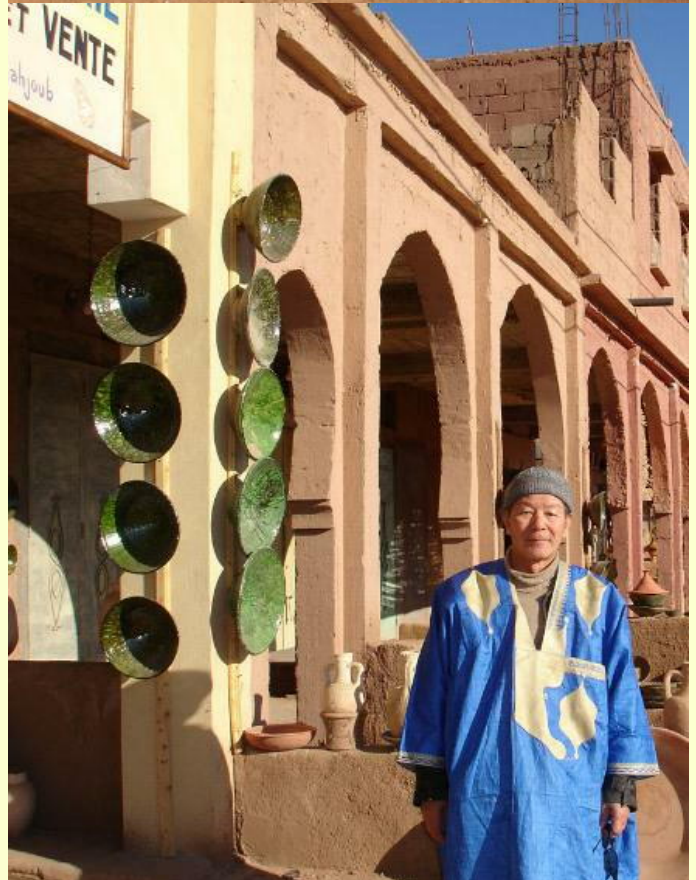
日も高くなりあたりが暖かさを取り戻したころ、ラクダの背に揺られながらの行進が始まった。元日の朝、とこ、習慣、宗教、民族と場所が変われば変わるもの、日本の正月のことなど思い浮かべるいとまもなくラクダの動きに身をまかせていた。こちらのラクダはひとこぶラクダ、ふたこぶのものは終ぞ見かけなかった。当然ご当地では自家用車がわりで時には乗用車にもなり、またあるときは貨物車にもなる。いろいろなランクがあるのだろうが一般に高級とされるものでは軽自動車なみのお値段がするといふ。ハッサン夫妻も一頭づつ自分用に持っていて、我々の朝のそぞろ歩きにも提供されていた。調教されている加減もあろうが非常におとなしい動物で、知らない人間が近付いても威嚇することもなく、体に触れても悠然としたものである。その目はあくまでも優しく、ひどい動物臭を発するでもなく、そばにいて何の圧迫感もない静かな存在であった。ひとこぶのラクダ、いざどこに座るものか見た目には不安があった。こぶの後ろに座ります。えー、そんなあほな、けつに向かって滑り落ちるやんか！いやいや、座って納得、そこには粗末な鞍ともいえないようなものがあり、座ってみると意外に安定感があった。女性に与えられたものには両手を添えるハンドルのようなものがあった。十何頭に二人の馬子？ラクダ子がつき乗馬、乗ラクダのときは一言発してラクダを跪かせてくれた。立ち上がれば相当の高さになり悠然たる気分で行進できた。動きは非常に緩慢で、あちこちカメラを向けるのに不自由や恐ろしさは無く、WやVEで経験した馬の比ではなかった。行進は先頭から末尾まで一列に手綱で連結され、良く見る砂漠のラクダの商隊の行進そのものであった。ただ背に乗るライダーの格好はと見ると、ある者は前のめりになり手すりにしがみついている者、また両手をはなして悠々とカメラを回しているものそれぞれであったが、ラクダライドで目的地に到着するころには皆いっかどの格好での行進となっていた。

砂漠のテントでも寝た。砂漠での初日も拜んだ。砂に穴を掘っただけのトイレも経験した。ラクダにも乗った。これより先は12 15世紀に栄え、現在のマリTZ,セネガル6W,ガンビアC5,モーリタニア5Tにまたがる広い地域に勢力をのばしたマリ王国の首都トンプクトウまで当時50日とも70日とも言われた大サハラ砂漠が広がっている。

我々の旅はこのあたりで踵を返し、またあの道を地中海近くまで引き返すのである。そう、首都のラバト、そして世界遺産の古都フェズ、メクネス、、。。。。まだまだ見なければならぬところが沢山残されているのであった。

(完)

ベルベル人の歓迎を受けて :上  
現地人衣装の筆者 :下



**Ji3ZAG-Rollcall**  
Saturday  
14,155kHz

参加記録 (100回以上)  
JA3UB 312 JA3PYC 200  
JA3AER 287 JP3AZA 150  
JA3AA 260 JE3BEQ 100  
JA3USA 226

大阪国際交流センター・ラジオクラブ

e-mail : ji3zag@ji3zag